教員名	新井　由紀夫　(ARAI　Yukio)
所　属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学　位	文学修士（1985　東京大学）
職　名	助教授
URL／E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/arai.htm／arai5177@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中世イギリス史　／　史料学　／　社会的結びつき　／　ジェントリ

◆主要業績　　総数（2）件

・新井由紀夫『ジェントリから見た中世後期イギリス社会』刀水書房 2005 年
・新井由紀夫「2004 年の歴史学界　－回顧と展望－　ヨーロッパ（中世－イギリス）」『史学雑誌』114-5(2005 年) 321-325 頁

◆研究内容

人間、生きていればかならず出くわすものが、きずなやしがらみといった、人と人とをとり結ぶ社会的な関係の問題です。ただしその具体的なあり方は、地域や時代、人の置かれた状況により、さまざまに異なった姿となってあらわれてきます。もし自分が、中世後期のイギリスに生きていて、家屋敷と所領をもつジェントリだったとしたら、どんなきずなとしがらみの関係のなかで暮らしていたのだろう？　そんな疑問を研究のテーマとしています。例えば、結婚するときには、どんな条件が決め手になっているのだろうか、いざというとき、頼れるような人をどのようにして見つけていたのか等々、これらの答えを探して史料を調べてゆくうちに、彼らが生きていた中世の社会の特徴が見えてくるのではないかといま考えています。昨年出た『ジェントリから見た中世後期イギリス社会』(刀水書房) はその成果をまとめたものです。

◆教育内容

３・４年生向け授業は、１５世紀イギリスの手紙史料をテーマに、一通の手紙から何がわかり、また何がわからないのかを考えたり、手紙の書式からいえることを検討しました。当時、羊皮紙や紙は大変高価で貴重だったために、手紙は細かな字でびっしりと書かれ、あまった部分は切り取って再利用するなど、ちびちびと使われていたのですが、手紙の文面はといえば、時候の挨拶のような文章が多いときには手紙の半分を占めるものもありました。もったいないなあ、なんでながながと挨拶文を書くのだろうという疑問を持ったことがそもそもの始まりです。そのうちに、貴重な紙を使ってわざわざ長い挨拶文を書かなければいけないような理由が当時あったのではないか、それを探ってみようと考えるようになりました。ゼミでは、最近の雑誌英語論文を、一年に７～８本、担当者による発表形式で読んでいます。各自が分担して、要約・コメントし、それをうけて皆で議論するというやり方です。テーマがあちこちに飛びますが、研究の新しい波にふれる充実感が味わえます。

◆共同研究例

・中世ヨーロッパの史資料に関する研究（科研）

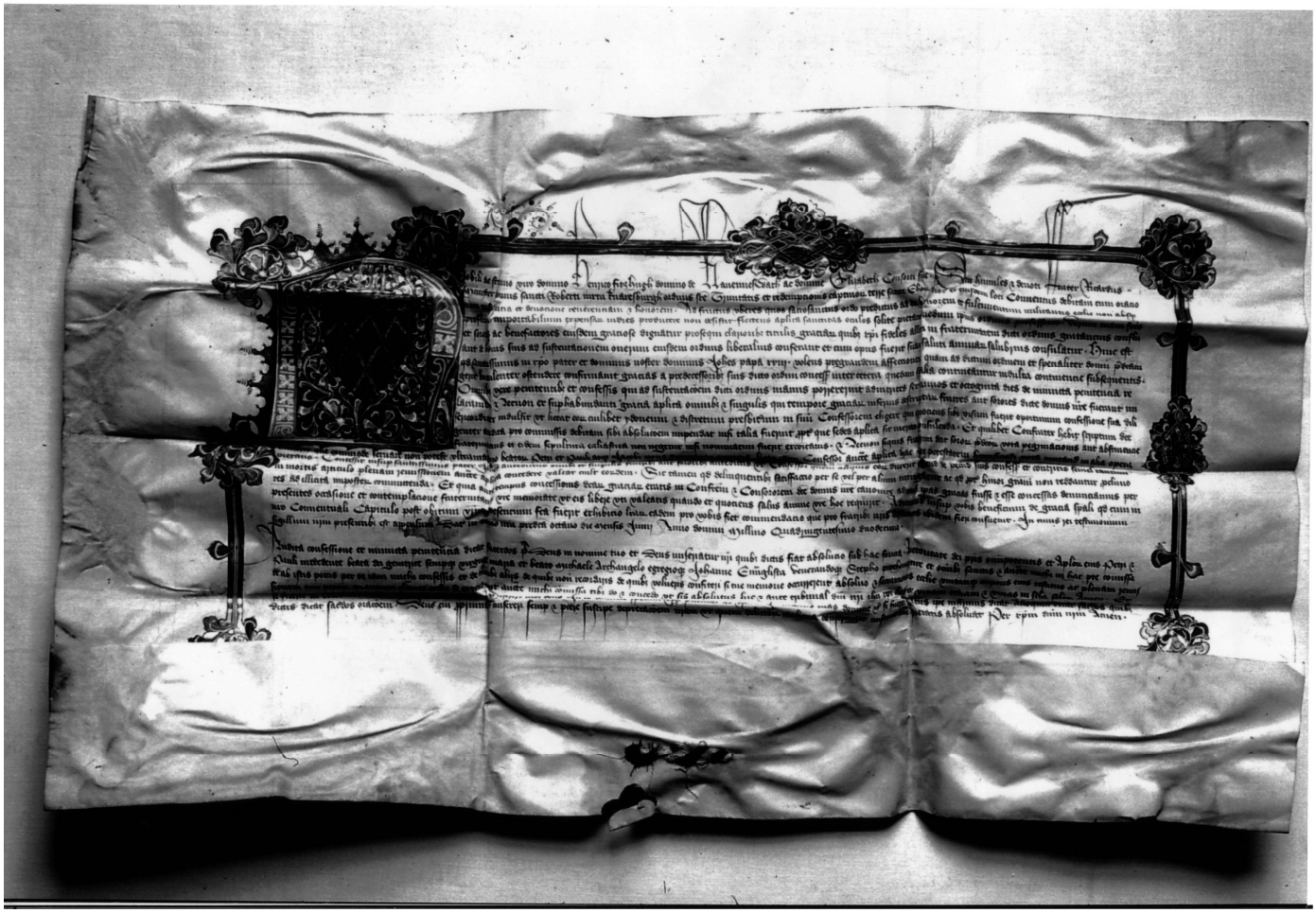
◆将来の研究計画・研究の展望

キャサリン・ラングレィというロンドン豪商出身でジェントリに嫁ぎ未亡人になった女性とラングレィ家に関する史料を集めて、ぼちぼち読み始めています。昨年は、彼女の遺言書を３・４年生と一緒に読みました。今年は、ラングレィ家の会計記録を読んでいます。マニュスクリプトを前にして一緒ににらめっこしつつ読んでいくと、四旬節にカキやムール貝やヒラメでタンパク質を取り、四旬節が終わって値崩れした棒ダラ等を買い占めしたりと、生活のありさまが手に取るように浮かんできて興味深いものです。こちらは現在進行中です。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・歴史的多民族多文化社会におけるリスクとコミュニケーション

◆受験生等へのメッセージ

なにごとにも好奇心を持ち、どんなことでもどん欲に楽しむという姿勢は、歴史学をやる上であんがい欠かせない要素だと思います。遊びや楽しみのなかから学問のヒントを得ることもあります。西洋史の山本先生の言葉、「子育ては面白い、子供を見ているとサイコロで振りだしにもどるように、自分の人生をはじめから学び直しているような気がする。日々新しい発見があるんだ。」は今の私の気持ちでもあります。

学生さん達との学科旅行での宴席で、比較社会史という授業のテーマ「ホモセクシュアルの比較社会史」が決まったのですが、やってみると奥が深く、史学の先生達との共同研究テーマにまで発展してしまったほどです。
歴史学で扱えないようなテーマはない、何でもありだと最近よく思います。歴史学をやる上でこうしなければだめだということもありません。われこそは、という皆さん、是非、お茶大比較歴史学コースにいらして下さい。